

講演者 児童文学者・矢崎節夫氏

## テーマ「金子みすゞの世界」

日時 平成十二年(二〇〇〇年)十二月十二日十六時十分  
会場 鶴川校舎・メイプルホール四階

今年度の文学部初等教育講演会は、大正一昭和初期の童謡詩人・金子みすゞの再発見者である矢崎節夫氏を迎えて、「金子みすゞの世界」と題してお話し願った。最初に学生による金子みすゞの詩の朗読にはじまった講演で、矢崎氏は、将来教職を目指す学生のために、教師のあり方を絞って、渾身の情熱を傾けて、金子みすゞの世界と教師のあり方について語っていただいた。以下にその概要を伝えるが、その前に、金子みすゞと矢崎節夫氏について簡略紹介する。

(岩間)

金子みすゞ (明治三

六年―一九〇三年―昭和

五年―一九二八)

本名・金子テル。山

口県大津郡仙崎に生ま

れ、幼少期に美しい海

を見て育つ。三歳のと

金子みすゞ

きに父が清国(中国)で客死。四歳のとき、金子家は仙崎で書店を営み始める。母、祖母、兄と四人暮し。一七歳で大津高等女学校を卒業。小学校以来、学業に優れ、また人柄が級友に好かれた。二〇歳のときに下関の親戚の経営する上山文英堂に移り、書店で働く傍ら、詩の創作を初め、「みすゞ」のペンネームで『童話』などの雑誌に投稿。西条八十に高く評価され、童謡界に知られる。二三歳で書店の番頭と結婚し、のち一児をもうける。夫の芸術活動への無理解、夫から性病を移されてそれが悪化するなどの不幸に会い、離婚する。子どもの将来を守るべく、二六歳のときにカルチンを飲んで自殺。

矢崎節夫(昭和三年―一九四七年)

東京生まれ。早稲田大学英文学科卒業。詩人・佐藤義美

まで・みちおに師事。昭和五七年、赤い鳥文学賞を授賞。

大学一年生のときに金子みすゞの詩に出会い、衝撃を受け、

みすゞ探しをすること一六年。みすゞの実弟で劇団若草の

指導者・上山雅輔氏所有の、みすゞの三冊の手帳(童謡集)



矢崎節夫氏

に出会う。以後『金子みすゞ全集』および『童謡詩人金子みすゞの生涯』等の出版に尽力し、金子みすゞの詩の甦りに貢献する。その功績に対し、日本児童文学学会賞などを授賞。以後全国各地で講演を行う。

みんなちがって、みんないい

「私と小鳥と鈴と」

金子みすゞ

私が両手をひろげても、  
お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のように、  
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のように  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

今読んでくださった「私と小鳥と鈴と」の中に「みんなちがって、みんないい」という言葉があります。「あなたはあなたでいいんだ」「いるだけで一〇〇点満点だよ」ということです。

又、「みんなちがって、みんないい」をちがう言葉でいうと、「丸ごと認めて傷つけない」ということとです。「大漁」という詩があります。

朝焼小焼だ  
大漁だ  
大羽鰯の  
大漁だ。  
浜は祭りの

ようだけど  
海のなかでは  
何万の  
鰯のとむらい  
するだろう。

みすゞさんは人にしか使わなかった「とむらい」という言葉も、どちらも同じいのちということを知っていたからでしょう。

地球にいのちが生まれて、四十億年の間、いのちにはアメイバーのようなものからホモ・サピエンスになるまでずっと受け継がれてきたのです。人も鰯も、ミミズも野の花もです。大切なことは、このいのちは、四十億年の中で、いつも一回限りのものであることです。一回切りだから大切で、美しいいのちなのです。すべてが光輝く大切ないのちです。

存在するだけで、すばらしいのです。

とても残念なことに、私を含めたたくさんの方が言うことを聞くとか聞かないとか、一方的にこちらのサイドからしか見なくなっています。向う側からものを見るということとをしません。でも両方が見えてはじめて「こだまし合う」ことになります。共に生きるという行為の眼差しが出来てきます。そのことを二二世紀に生きる人が憶えてくれたら、きっと二二世紀はすばらしい世紀になるでしょう。

「浜は祭りのよつだ」と喜んでいるのはこちら側、人間側です。でも「鯛の串いするだろう」と言ったときに、初めて向う側から物事を見ることができるようになります。

小学生が「なぜ人を殺してはいけないの」と質問すると、向う側から見ることができないので、大抵の先生は説明できなくて、しーんとしてしまいます。「じゃあ、あなたは殺されているの」と聞くと、その小学生は待っていましたとばかりに、「ぼくは平気だよ」と言います。なぜなら、この質問もこちら側からのものだからです。

「あなたの友達に殺されていいと思っているといますか」と聞いて初めて、向う側から考えることができるのです。友達は「いやだ」と言います。「いや」という人を殺してはいけないのです。こちら側とあちら側とこだまし合って、社会が成り立ちます。「見る眼差しを変えましょう」とみすゞさんは言うのです。「みんなちがって、みんないい」。相手を丸ごと認めるのです。嫌いでもいいですが、嫌いな

人を傷付けてはいけない。殺してはいけない。だってその人はそれが「いや」だからです。

私たちは全てを平等に愛さなければならないという観念にとらわれています。

でもこの世に平等な愛はありません。

怪我をしたり病気をしたりした子には、沢山の愛をあげない限り、その子は治りません。今一番声かけが必要な子に声をかけなければなりません。だから、学校の先生はクラスの子を不平等に愛してあげてほしいと思います。そうしなければ全員が平等に幸福にはならないからです。個性を育てると言いながら、結果としては、皆いっしょのことをしなければいけないようにしてしまっているような気がします。でも、基本は、すべての子どもは、屈るだけで役に立っているのです。

みすゞさんに「土」という詩があります。

こつつん こつつん

打たれる土は

よい 崗<sup>かた</sup>になって

よい 麦生<sup>むぎう</sup>むよ。

朝<sup>あさ</sup>から晩<sup>ばん</sup>まで

踏<sup>ふ</sup>まれる土は

よい 路<sup>みち</sup>になって

車<sup>くるま</sup>を通<sup>とお</sup>すよ。

打たれぬ土は  
踏まれぬ土は  
要らない土か。

いえいえそれは  
名のない草の  
お宿<sup>やど</sup>をするよ。

地球に存在するすべてのものは居るだけで役に立っているのです。人も同じです。子どもはただ居るだけで良いのです。なぜならば、もし地球から未来を受け継ぐ人がいなくなれば、絶望しかないからです。受け継ぐ人がいるから希望を持つことができるのです。このことを大人はすっかり忘れてしまっています。だから忘れてしまった大人のためにみずぐさんは甦ったのです。大切なことを思い出しやすくなるためにです。

サルのお母さんは赤ちゃんを左腕で抱きます。

どうしてでしょうかと聞くと、多くの大人は右手で樹に登ったりできるからと答えます。違います。赤ちゃんは、左の方が安心できるからです。この点で現在の産婦人科には問題があります。産まれた赤ちゃんを母親から隔離してしまうからです。胎内にいるとき赤ちゃんは、ものすごい心音を聞いて育ちます。体重の一三分の一は血液で、五〇キロの体重の人なら、四〇〇〇CC、大きなペットボトルで二本分あります。それが一分間で全部身体を周るのです。ところが生まれた瞬間にこの慣れ親しんできた心音が聞こえなくなり、赤ちゃんは不安に怯えます。お母さんに抱かれて再び心音を聞いて初めて安心するのです。お母さんは抱いているうちに母性本能がほとぼしり出てきて、すてきなお母さんに変貌します。ところが産院での新生児の隔離は、お母さんを患者扱いすることになります。だから平気で赤ちゃんをコインロッカーに入れたり、死ぬまで叩い

たりしても何とも思わない母親が出来るのです。こうしてお母さんのプロになるチャンスが奪われている、そんな気がします。

### こだまする世界

「こだまでしょうか」という詩があります。

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと

「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう。

そうして、あとで  
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、  
いいえ、誰でも。

この世はすべて「こだま」です。こだまは「ヤーホー」と言う、「ヤーホー」と半分の音で返ってきます。こだまとは丸ごと受け入れて返してくれる行為です。子どもが「痛い！」と言えば、「痛いね」と言葉を返すということです。すると、子どもの痛みは半分になります。その上で、「痛いの、痛いの飛んでけ！」という呪文も効果を発揮しました。今の子を取り巻く大人は、こだまさない大人たちです。「痛くないでしょ。我慢しなさい」という大人に子どもは囲まれています。痛くないと否定された痛みは、心の中の器

にそのまま入れるしかないのです。そして、とても残念なことに、中学生くらいになると、その器いっぱいになる子がいるのです。そうすると、新しい痛さを入れるためには、一度、器をひっくり返さなければ、ならないのです。すると、「なんであんなやさしいいい子が」と言っつて、大人は憐てます。時代が変わったね、とか、世の中変わったね、学校変わったね、と言います。そうではありません。私達がそうしたのです。

「先生あのね」「なあに」。で初めてごだまし合います。それをしないで、否定したり、無視したりして、大人はその子の存在を消してきたのです。お母さんも先生もみんな、相手の側から見る思いを忘れたのです。「そうだね」とまます受け入れること、そこに居ていいということを確認すること、そのことが二一世紀には大切です。

金子みすゞは一世紀前の人なのに、私達より遥かに前を走っている人です。ここに「葉っぱの赤ちゃん」という詩があります。

「ねんねなさい」は  
月の役。

そっと光りを着せかけて、  
だまっつうたうねんね唄。

「起っきなさい」は

風の役。

東の空のしらむころ、

ゆすつておめさまさせる。

昼のお守りは

小鳥たち。

みんなで唄をうたったり、

枝にかくれて、また出たり。

ちいさな

葉っぱの赤ちゃんは、

おっぱいのでねんねして、

ねんねした間にふとります。

みすゞさんはお母さんの心を持っていました。男性が唄えば、朝、昼、晩、という順になるところを、いきなり夜の子守歌から入っています。そして赤ちゃんは、星々、太陽、鳥の唄、風などすべてに育てられるというのです。一人の人間が生きているのに、宇宙のすべてが支えてくれると唄っています。

人の場合にも、最初に辛いことがあるから、光、つまり幸せがあるのです。「辛い」は「幸せ」に変わるのです。寂しさと不安があるために、はてしない幸せが生まれます。

つらいことはつらいと受け入れることが大切です。

倉田百三（一八九一〜一九四三）の『出家とその弟子』で、

親鸞の弟子・唯円は師に向かつて「和尚様、私は淋しいんです」と言うと、親鸞は「私だって淋しいんだよ。でもお前の淋しさは対象のある淋しさだけれど、私の淋しさは運命としての寂しさだ。はてしない淋しさだよ。何事にも代えられない寂しさだ」と応えています。対象のある淋しさは普賢の私達の淋しさ。何かをもらえなかつたり、何かがなかつたりするから淋しいのです。でも宿命的な寂しさとは、一番大切な命を守るためには、ほかの生命を食べなければならぬという寂しさです。だから人間はできるだけ優しくなろうとします。そうすると唯円が親鸞上人に、ではどうすればよいかと聞く。親鸞は「淋しいときには、淋しがればよいのだよ」と応えています。良寛も「病むときは病むがよろしい。死ぬときは死ねばよろしい。それが災いに遭わない最良の方法だ」と言っています。

否定することなく、淋しいときは淋しいと言ってしまうこと。言葉は声に出すと楽になるように作られています。言わないで、じーっと心の中のために待っていると、私達ははてしなく下がっていきまいます。それを下がらせないようにならされたのがプラス思考。でもプラス思考には無理があります。子どもが痛いのに、笑え、と言うのと同じだからです。そうではなく、辛い、辛い、と言っているうちに辛くなくなるものです。だって言葉がこだまするからです。辛いと認めてしまえば、それ以上墜ちなくなってしまうのです。

人は辛いときに自分一人だけが辛い、と思ってしまう。でも皆さんが辛いときは皆さんのお友達は幸せなことはありません。皆さんが幸せなときにお友達が不幸ということも基本的にはありません。大好きな者にとっては、お互いにこだまするから、お友達であつたり、恋人であつたりするのです。だから私だけが辛いなんて思わないことです。私が辛ければ私の友達もみんな辛いと思うことです。自分の辛さを取ってあげるのは自分だけだ、と気付くことです。そして、何日か経つたら、「これくらいですんでよかつたね」と自分に言つてあげることです。

金子みすゞさんという人は、一人きりの淋しさも一人きりの幸せもないよ、ということをよく知っていた人です。だからこんなかわい詩、「花屋の爺さん」を書いていきます。

花屋の爺さん

花売りに、

お花は町でみな売れた。

花屋の爺さん

日が暮れりゃ、

ぼつり一人で小舎のなか。

花屋の爺さん

さびしいな、

育てたお花がみな売れた。

花屋の爺さん

夢にみる、

売つたお花のしあわせを。

花屋のじいさんが売つた花の幸せを夢見るとはどういうことでしょうか。花が幸せのためには、花を買つた人がまず幸せでなければいけません。だから花屋のおじさんが祈

っている幸せというのは、買った人が幸せであるということとです。だから、みすゞさんの幸せは人偏のついた「倅せ」です。人が幸せであることが、自分の幸せ。自分も幸せであることが、みんなの幸せ。ここで「こだまし合う」ということが成り立ちます。皆さんが学校の先生になったときに一番伝えるべきことは、このことです。

一人きりの幸せはない、ということとです。だから、人を殺してもよいということは成り立たないのです。あなたと誰かがいて、この世の中は成り立つからです。他者の存在を認め、お互いにこだましあって生きるということとです。だから人偏の「倅」という字を書きます。

小学生にこういうことを言うとしてごく喜んでくれます。或る小学生は、「せっかく幸せに人偏がつくなら、不幸の隣にも人偏がつくと、なんだか淋しい気持ちが消えて嬉しい」と言いました。大人には想像もつかない着想です。このように、先生という職業は、こんなにいつも感動してくれる人たちと出会う、倅せな職業です。

### 良き師との出会い

プロの先生は、たえず相手の立場に立って考えられる人のことを言います。私は学校の先生になる道をえらばなかつたけれど、学校の先生ほどうらやましい職業はありません。(著名な昆虫学者の)ファーブルはこのように言っています。「この世の中には、先天的運命と後天的運命とがあ

る。先天的運命は変えるチャンスはない。生まれた後の人生は、大きく変えるチャンスが三回ある。その第一が、よき先生に出会ったら、貴方の運命は変わる」というものです。

私が詩を書くようになったのは、小学校四年のときからです。幸に私は四年生のときに、よき先生に出会ったので、一年から三年までは、私は毎日先生から殴られていました。本当によく殴られていました。家へ帰ると母が、今日はどこにこぶがあるの、と捜してくれた位です。私は勉強のためではなく、休み時間と、体操の時間と、給食の時間のために学校に行っていたようなものです。あとはがまんするだけです。から、しよちゅう騒いでいて叱られたのです。

でも若い女の先生が学校に赴任してきました。本当に若いということはいいですね。もしこの先生が私の担任になったら、私の人生が変わっていたと思いました。で、「なつたらいいな」という想いを飛ばしてみたんです。そしてたらその先生が担任になりました。橋見千恵子先生と言います。ドキドキして最初の約一週間、嫌われないように静かにしよう、我慢しました。一週間後に我慢し切れなくなつて、休み時間に先生におぶさりました。「節ちゃん、重いからやめて」と言われるのだとばかり思っていたら、「節ちゃん、甘えん坊だね」と言つて、「よいしょ」と背負ってくれたのです。その感触のよさはもうやめられません。(休みの時間を待ち兼ねて) 毎時間背負われていました。

そうしたら、二週間ぐらい経ったらクラスの女の子から

「節ちゃんのおかげで、先生は耳の病院に通っているよ」と告げられました。皆も背負ってもらいたくて先生のところへ来ると、(先生を独占したくて)「いいだろう」とか言って、私が先生の耳もとで叫んでいたのです。ある時から先生の耳に綿が詰まっていることは気付いていたのですが、理由が判りませんでした。ショックで直接先生に聞けなくて母に頼んで聞いてもらいました。すると真相が判りました。でもすごかったことは、先生はそのことを言わずに私を背負い続けてくれたことです。もうちょと経ったら、チャンスを見つけて、「もうそろそろやめようよ」と言おうと思っていたけれど、「もし、そう言ったら、節ちゃんが傷付いて、もう学校に来なくなってしまうかもしれない」と思って、こちらの側に立って考えてくれて、言わなかったのです。

それで私は、すごいショックでした。本当に先生にこれ以上、傷を作ってはいけないと、四年生の私は深刻に思いました。もうこれ以上、先生に負ぶさるのはやめようと思つた。その時に、先生の好きなものを好きになることで、先生に「ごめんなさい」をしようと思つたのです。先生は毎週、原稿用紙に詩を書いて、後ろの黒板にそれを貼っていました。その詩を覚えてあげたら、先生がよろこぶだろうな」と思って、詩を覚えました。宮沢賢治の「雨にもマケズ」という詩でした。すると「先生の大好きな詩を覚えてくれたんだ。うれしいな」と言って先生は、とても喜

んでくれたのです。

これはすごいことです。先生に嬉しいなあと言われるほど、子どもたちの喜びはないのです。覚えてただけで喜んでくれるのなら、書いたらもっと喜んでくれるだろうと思つて、そこで私は小学校四年生のときから詩を書き始めたのです。もしあの時に、その先生に出合わなかったら、そうして、上手に受け止めてくれる母がいてくれなかったら、今の私はなかっただろうし、みずゞさんも甦っていなかっただろうと考えたら、先生という仕事は、この世の中で一番よい仕事です。だから、「良き先生に出会ったなら、あなたの運命は変わるだろう」とファーブルは言ったのです。

次は「良き友達に出会ったなら、人の運命は変わるだろう」とあります。三番目は、「良き先生にも良き友達にも出合わなかったら、たった二冊の本に出会ったら、人の運命は変わるだろう」とあります。私は、この三番目のような本が一冊でも書けたらいいなあ、と思つて生活しています。でも、先生はいるだけで、子どもたちにとってははてしない喜びであることができるのです。

学校の先生でプロというのは、三つの仕事をする人のことです。それは詩人と落語家とお坊さんの仕事です。詩人というのは、夢や理想や希望を語り、子どもに夢や理想を育てることです。次は落語家。いまでもつらい思いをしている子の心を支えてあげて、少しでも励ましてあげ、少しで

も明るくしてあげることができずからです。三番目はお坊さん。修学旅行で気持ちよさそうに説明してくれたお坊さんのように、道を説くからです。こんな生き方をしたらいいよ、と人にちゃんと示せる先生であってほしいです。この三つがあってはじめて、人の先生ということになります。

### 児童浴

先生は、目の前に子どもたちがいてくれて、はじめて成り立つ仕事です。だからあずかっている子どもたちは、すべての大人たちにとって宝物です。宝物をあずかっている先生が、自分自身も別な宝なんだというふうに、誇りをもって仕事をしてくれないならば、それはとっても失礼なことなのです。

教育実習に行くと思付くと思いますが、学校の先生は普通の年齢より若いと感じるでしょう。なぜでしょうか。なぜって、学校の先生は、森林浴以上の「児童浴」をしているからです。はてしなく子どもたちからエネルギーをもらうのです。元氣を出すためにお金を出してエステに行ったりスポーツクラブに行ったりするところを、先生はただで子どもたちからエネルギーをもらって元氣になり、その上給料やボーナスまで貰うのです。こんないい職業はこの世の中に一つとしてありません。

さらに言えば、その時に自分が出会った子どもは、その時の子どもであって、十年後にはまったく違う人として出

会うことができるという、いつでも変わるチャンスのある人達と出会える職業は、学校の先生しかありません。自分が出会ったときとても腹が立つ子ども、その後大きな変化をすることがよくあります。だから学校の先生は、子どもと出会った瞬間にその子の一生を決めないことです。今私が出ている子どももあるがまま受け入れて、その子が伸びるのを見守るのです。そういう意味で、この世の中で一番良い職業は教師という職業です。

### 子どもの側から見ると

教える、ということは学ぶということですから、先生は子どもたちからはてしなく学ばせてもらっています。そして人は二十年経たなければ成人になれませんから、先生に成り立ての人はゼロ歳児です。二十年も先生をしたら責任が出てきます。何度もいいますが、プロとは向こう側からも見ることができるといふことです。

埼玉県の先生の実例です。一年生で算数のテストがあった、或る生徒が〇点を取ってきました。その子のお母さんはショックでした。そこで答案をよく見たら一十一〇三、二十二〇五、三十三〇七、四十四〇九、五十五〇十一という具合でした。お母さんはびっくりして聞きました。「どうしてこのように答えたの」と。その女の子はとっても悲しそうに言いました。「だってね、お母さん。問題は、次の数を答えなさい、だよ。」これはパーフェクトの答えだったん

です。(問いの言葉そのままに受け取る) 正解は次の数を  
書くことでした。このことに気が付かないで×点を付けた  
先生はプロではありません。たぶんその先生は前に高学年  
を受け持っていて、その時のままで一年生に向かつてしま  
ったのでしょう。一年生にとつては「足し算をしなさい」と  
言ってあげなければならなかったのです。

しかし、先生として、もっと恐いのは、バツをつけなが  
ら一度もたたずまなかつたことです。私だったら三重丸以  
上の花丸を付けて返してあげます。そうしたら、お母さん  
はふと「あ、うちの子間違えてる！」と気付くでしょう。そ  
うしたらお母さんが質問の意味をその子に教えてあげるか  
ら、その子は次からちゃんと答える機会を持てるのです。  
でも残念ながら、そういうミスをする先生は、子どもの側  
に立ちませんから、お母さんの出した理由を説明する手紙  
に返事を出さなかつたのです。その先生はお母さんを味方  
にするチャンスを失いました。プロであつたら、謝ってしま  
えばよいのです。「とっても申しわけなかつた、気付かな  
くて。教えていただいてありがとうございます」と言ったらそのお母  
さんは、はてしなくその先生の味方になつたでしょうに。  
それ以後、お母さんは不安でしようがなくなりません。あの  
先生、また何をやるのだらうと。だからプロとは失敗があ  
つても、それを補って、喜びに変えることの出来る人とい  
うのです。

金子みすゞの「転校生」という詩があります。

よそから来た子は  
かわいい子、  
どうすりゃ、おつれに  
なれよかな。

おひるやすみに  
みていたら、  
その子は桜に  
もたれてた。

よそから来た子は  
よそ言葉、  
どんな言葉で  
はなそかな。

かえりの路で  
ふと見たら、  
その子はお連れが  
出来ていた。

この詩に関して、或る経済界の方が学校の先生の大会で  
すごい提案をしています。

その方が言うには、もし転校生が来たなら「こちらから  
分かる言葉を使ってあげよう。分かってあげよう」とみ  
すゞさんは考える人です。学校の先生にお願いしたいのは、  
転校生が来る一週間くらい前に、転校生との付き合い方の  
ルールを作つたらどうか。日本で一番この子を受け入れる  
クラス作りをしてほしい。先生が決めるのではなく、くじ  
引きで五人を決めて、そのことを考えるグループを作る。  
そうすると五人の子は一生懸命に考えて、まず、A君はき  
っと転向してくる子をいじめるだらうな。だからその子に、  
転校生のプロフィールを紹介する仕事を頼み、どういう学  
校からきて、どういう土地からで、どういう子で、家族は  
何人かなどを皆の前で発表してもらおう。人間は、自分が皆  
に紹介した人のことはいじめはしないものです。最初から

味方になります。それから、最初に学校に入ってきたときに、その子は声をかけられないものだから、最初に声をかける役を決める。それから、授業はここまで進んでいるよと教えてあげる役、学校の中を案内してあげる役、写真を撮ってあげて、その子のお母さんたちに写真を届ける役の子、それぞれが転向した子が第一目に出会うことを分担して受け入れてあげる。そうしたらその子は皆と友達になれるし、クラスの子は皆、その子の友達になる――。

すごい発想です。こんなことを考える人が経済界にいるのです。逆に教育界にいな過ぎることの方が不思議です。なぜかという、向う側から見ることができなくなってしまうからです。もし皆さんが先生になったら、そういうクラスを作ってあげてほしいです。そうしたら、その来た子はどんなに嬉しくて、そのクラスのことを決して忘れないでしょう。そして、いじめるチャンスが一度もなく、いじめないで済むことよって、(いじめがちな)その子だつて、いじめなくてすんだ上、自分の嬉しさに出会うことができるのですから。

本当は皆、何かいいところがあるのですね。本当は全員クラスの何かの一番なのです。私達は成績が一番とか、何かが一番の子のみを一番と思ってしまう、あとはその他だと片付けてしまっているけれど、全員何かの一番があるはずなのです。だからクラスの子の全員に一番を見つけられるかどうかで、プロかどうか分かんると思います。

もし私が先生だったら、授業が終わって帰るとき、自分のクラスに戻り、全員の表情を思い出します。もしそれを思い出せなかったら、その子をよく見てあげなかったことなのです。翌日その子に沢山言葉をかけながら授業をしようと思います。朝に会ったときと夕方帰るときに表情が変わっていないかったら、その子は分かったことがなかったんだな、ということ。分かんるということは、変わるということなのです。先生になり立てのときからこれやっていたかだかと思えます。

そうして、どんな小学校に赴任しても、ジャージで授業をしないであげてほしい。先生の宝物は、ほかの大人ではなくて、自分のクラスの子どもたちですから。宝物の前でジャージで立つのでしたら、他の人の前でもジャージで立つべきです。研究発表会であろうと、父母会であろうと。それなら子どもは、何の不信感も持ちません。授業参観のときだけ先生がきれいな格好をしてくると、子どもたちは「今日の先生、きれいだね」と言います。それは実は、「いつもそうしてほしいのになあ」ということなのに、先生はそれに気付かないのです。どうしてもジャージでなければいけないというのなら、授業参観のときもジャージで立てば、それでいいと思います。子どもと大人との差別をするな、ということ。本来、教壇のところに立っているときが先生なのですから。

## 見えぬもの

最後に、みずゞさんの「星とたんぼぼ」という詩についてお話しします。

青いお空の底ふかく、

海の小石のそのように、

夜がくるまで沈んでる、

星のお星は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、

見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぼぼの、

瓦のすきに、だアまって、

春のくるまでかくれてる、

つよいその根は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、

見えぬものでもあるんだよ。

星だって星はありますね。ただ明るすぎて見えないだけです。根っこは動かないというけれども、一株の稲が豊かに稔るためには、どれだけ伸びているかをこのあいだ調べてみました。全部きれいに洗って、一つの稲の根っこを切っていて、枝分かれました根を数えると、なんと三五八本ありました。それらを全部つなげて測ってみると、二九メートル一五センチ四ミリの長さがありました。というこ

とはどういうことでしょうか。一株の稲が見える部分であれだけ豊かに稔るためには、根を通して沢山の水素くんや酸素くんや窒素くんに出会わなくては豊かにならないということですよ。これと同じく、沢山のすてきな人に出会うために、学校があります。学校というものは、自分を育てるためにあるのです。学校というところは勉強を教えるためだけにあるのではなくて、その子が丸ごと幸福になることを教えるところです。うそをつかない、でもいい、友達を大切に、でもいい、なんでもいいから、その子の一生にとって大事なことを先生が熱く語っていてくれたら、二一世紀の子どもたちは幸せになると思います。そんな先生になって下さったら、本当にすばらしいことです。

私達みずゞファンの人達はいま、ネパールに学校を建てたり、お医者さんを派遣したりしています。一校建てるのに約六〇〇万円かかります。でも私達の仲間の一人は、二〇何年も前から、三〇校の学校建設に携わってきました。ネパールでは未だに五歳までに五人に二人が亡くなっています。ネパール語を知らない人は十人に三人くらいいます。学校がないからネパール語を教わるチャンスがないのです。小学校だけでも八千校も足りないのですから。みずゞ小学校を訪問したときに、子どもたちが五人、開校式に「星とたんぼぼ」の詩を日本語で唄ってくれました。

「一略」

一生懸命に唄ってくれました。なんでこの歌を唄ったの、と聞いてみましたら、こう言ってくれました。「学校は目に

見えます。私達には学校がなかったので、村にはここまで道がありませんでした。井戸もありませんでした。でも学校ができたおかげで、道が出来、井戸が出来、どぶ水を飲まなくてすむようになりました。そして学校があるお陰で、勉強する機会を持つことができました。今、二五〇人の子どもたちがここで勉強をしています。この大好きな学校は目に見えるけれど、その学校の後ろには、学校を建てるために協力してくれた日本のお父さんやお母さんやお友達がいいます。私達は見る事ができない人達がいってくれて勉強することができなのです。見える学校の後ろにいる、見えることができない人達のことをいつも忘れないためです」と言ってこの歌を唄ってくれたのです。そのことを私達は大変嬉しく思っています。今はこの歌を子どもたちはネパール語でも唄っています。

私の願いは、日本中の子どもが若い先生方からいろんなすてきな言葉を聞いて、豊かに育っていったときに、世界で一番貧しい国・ネパールの子どもたちも大人になって、どこかでお互いが出会った時に、「金子みすゞ」という名前を両方が知っていて、同じ歌を日本語とネパール語で口ずさんで、仲良くなれるそんな時代がきたらいいな、という願いです。それが、みすゞさんの嬉しさとはしになり、幸せとばしになると思うのです。

金子みすゞという人は、こちら側と向う側と、両方の眼差しを持って人でした。皆さんは、もし先生になった

ら、そして、先生にならなくとも、お父さん・お母さんになる時があったら、その時、今度は子どもたちの側から見たら、どんなふうであつたらいいかなという様に気付いていただけたら、どんなに嬉しいでしょう。そしてどんなことも、すべて言葉で伝えるのですからどのような言葉を使うかによって、その人の心が見えてきます。嬉しい言葉を沢山使うことによって、いつでも自分の心は変わるチャンスがあるということも覚えておいて下さい。私達は、学生運動をやっていたときに、激しい言葉やきつい言葉でこの世の中が変わると思つて闘ってきましたが残念ながら何も変わりませんでした。しかし今、金子みすゞさんが甦つたお陰で、沢山の人が小さな子から百歳のお年寄りまで、その眼差しをやさしく変えることができました。それはなぜかと言うと、やさしくて、柔らかくて、たおやかな言葉だけが人の心を変える力をもっているからです。そのような言葉だけが、行つて戻つてくる力を持っています。こだまする力を持っているのです。

\*

今日は、久しぶりに、大学で将来学校の先生を目指す学生さんに、お話をする機会を作ってくださいました先生、それから皆さん、一生懸命に聞いてくださって有難うございました。深く感謝申し上げます。(拍手)

\* 出典 「金子みすゞ全集」(JULIA出版局)より。

(現代かなづかいに改めました) 編集部  
金子みすゞ顔写真提供 金子みすゞ著作保存会